

権力の不快なねじれ

石川洋行

「陰謀論」論序説

——全体主義の指導者は普通の意味でのデマゴグではないし、マックス・ヴェーバーの言う「カリスマ指導者」でも断じてない。彼らがぬきこんでいる点は、事実と対立する完全な虚構の世界を築くに適切な要素を既成のイデオロギーから選び出す、過たない確かさなのである。(ハンナ・アレント『全体主義の起原』)

1. 「陰謀論」を考える

「Qアノン」を中心とするトランプ支持者が引き起こしたアメリカ議会襲撃事件(二〇二二年一月六日)は記憶に新しく、陰謀論がときに異常な妄想を伴って社会を攻撃する事実を改めて実感させた。このような状況を受けて、『陰謀論』の時代」を特集に据えた『現代思想』五月号においては、哲学や社会学、宗教学から科学史までさまざまな「陰謀論」論が一举に集められることになった。そのなかの石戸論氏の論考(「陰謀論者の「不安」」)は同掲載誌のなかでも稀に見る酷い記事であったが、他方でこの

論考は巷間「陰謀論」を巡る言説のパターン、その語り方の特徴をいくつかに反映するものであり、却ってわれわれにとつて重要な論点を逆立した形で提起してくれてもいる。従つて、当該論考を主な出発点として、巷間語られている「陰謀論」とその語られ方の問題点の双方を検証し、それを乗り越える形で「陰謀論」が社会に問いかける問題系の峻に踏み入ることが本稿の役割である。先に「稀に見る酷い記事」と書いたのは、論証が全く成立していないからである。石戸論考は右派論客と陰謀論との親和性を論じたものだが、百田尚樹の「Trumpism」を論じる条りで石戸は以下のような引用を行つている。

今、あらためて問う必要があるのは、彼らの不安は何に起因するのかということだ。私が取材する範囲において、要因が第一に台頭する「中国」にあることは間違いないように思われる。『ルポ 百田尚樹現象——愛国ポピュリズムの現在地』(小学館、二〇二〇年)の取材で、インタビューに応じた百田は私の前で堂々とこう語っていた。

時代になってきました。

彼がトランプにしがみついた理由もこの発言から読み取れる。結局、右派論客の多くは、トランプが中国に対して強い態度を取れる唯一無二の大統領だと思つていた。そこで彼らは自らの不安を解消してくれる相手として、トランプへのコミットメントを強めたのだ。(＊1)

百田の発言を含む本引用箇所には、石戸氏自身の記述や調査倫理の問題にとどまらず、巷間「陰謀論」について語る語り、筆者が「陰謀論の他者の切り離し」とよぶ言説的貧困とその問題点が顕著に表れている。この問題点をまず整理しておこう。

(1) 論証の手續きの無視。一読して分かるように、引用箇所から百田の中国脅威論を引き出すのはかなり無理がある。百田の発言自体は典型的な「転向者」のそれであり、政治的立場の表明としてそこまで突飛な主張ではない。しかも、それだけ読めばかなり整然とした発言である。しかし、石戸論考はこの発言から強引に中国脅威論を読み取ろうとする。不適切な引用による結論ありきの飛躍は、言論を担う者としての素質を疑わざるを得ないものであり、エッセイ調の本寄稿は研究論文とはいえないものの、『現代思想』誌への掲載文章としては致命的である。

(2) 社会集団に対する不適切で粗雑な比較。当該論考は右派と陰謀論との親和性を論じるものでありながら、論考後半部において唐突に「加えて指摘すれば」と前置きされて、左派系陰謀論なるものの存在が示唆され、「右派も左派も結局同じ穴の貉」という結論が強引に導かれる。しかしそこでは百田尚樹や甘利明のよ



いしかわ・ひろゆき 1988年生まれ。刈谷高校・東京大学教養学部(表象文化論)卒、同大学院教育学研究科単位取得退学。専門は社会学史・消費社会学論。現在八洲学園大学他非常勤講師、共著に『共感覚から見えるもの』(北村紗衣編、勉誠出版、2015年)、主論文に『ボードリヤールと生権力論』(『研究室紀要』41号、2015年)、『アイロニーに抗する〈主体〉』(『ソシオロゴス』39号、2015年)、『モースにおける競覇型贈与の社会学史的検討』(『社会学史研究』41号、2019年)などがある。

僕はもともと政治的な人間じゃないんですよ。政治は嫌いです。(自伝的小説)『錨を上げよ』(講談社、二〇一〇年)の主人公は左翼も右翼も嫌いでしょ。僕と似ていて、全部嫌いなんです。僕は昭和三十一年(一九五六年)の生まれですが、育つていく中で、自民党政権ではロッキード事件やら、官僚の腐敗やらいろいろある。左翼は「世界同時革命」だとかよくわからないことを言つて、運動をしている。愚かしいものだと思つていました。今になって振り返れば、日本は国内問題だけ考えていればよかつた時代でした。当時、中国は発展途上国でしたし、ソ連は衰えていく過程で、北朝鮮もミサイルなんて持つていなかつたし、韓国もどうということはない。今はどうですか。日本周辺はきな臭い

うな陰謀論に匹敵するような例証は全く行われておらず、このような批判方法は控えめに言ってフェアではない。この問題については後述する。

(3) 事実判断をばやかした、だらしなく冗長な論述の展開。それは先の引用の「結局」や「加えて指摘すれば」といった語用凝縮された形で顕れるが、このことが結果的にあてもない、こうでもない曖昧に引つ張つておいて突然自分の結論に突然落としてこむ行論展開をもたらしている。曖昧に解像度を低めてポエティックに語る記述姿勢は、本人の『リスクと生きる 死者と生きる』(亜紀書房、二〇一七年)にも同様に確認できる。

(4) 引用部から示唆されるとおり、読者に対する石戸氏の関係が、インフォーマント(百田)について「ボク知ってるよ」という語りの形式をとっていること。確かに百田の発言は、本人のヘイトスピーチや差別煽動にまみれた暴言を知る読者にとっては意外性があり、新たな気づきを与える可能性がある。だが当該論考では、論証に必要な手続きをすつとばし、発言が論考中に適切に根拠づけられていないので、読者は戸惑うばかりである。このような語りは後段の甘利明による日本学術会議に関する虚偽情報の発信の件に関しても同様に確認できる。そこでは「少なくとも、甘利は永田町の評価は決して低くはない政治家だ。私がかつて所属していた『毎日新聞』などリベラル系メディア(筆者註…?)の記者からも、ベテラン官僚からも一目置かれていた。」(p.113)という、命題の検討とは関係ない個人的主観が挿入されるが、これは属人的な権威に訴えかけて事実判断を誤魔化そうとする点で、陰謀論が跋扈する前提を準備する態度といえる(*2)。これらは、確かに著者の取材によって知りえた知見なのかもしれないが、い

し、不公正な決定や隠蔽工作、不作為による棄民を行う場合もある。これらの場合、「大きな力」は妄想どころか現に実在しているものであって、この点を丁寧に弁別判断しない限り、それが陰謀論か疑念不信か現実的な批判なのかは俄かに断定しづらい。「陰謀論」という安易なラベリングは、このような現実の権力関係を認知不可能にしてしまう危険性を有するのである。

ある発想が陰謀論か、それとも権力の問題行為に起因する正当な不信なのか、その判断はむづかしい。加えて、現代特有の問題として、SNS上の「ネタツイ」のように、滑稽な陰謀論を擬態し面白おかしく演じるネットカルチャーもある。現代において陰謀論を論じることは、これらの微妙な意味判断の綾を腑分けしながら、そのものもつ社会的意味を考える営みに他ならない。N・ルーマンに倣って言えば、陰謀論/正当な不信のコミュニケーション的振分けの境界線はどこに見出されるのか。これを発言者の属性や集団、メディア形式の特性等に留意し注意深く見極める作業が必要になるのである。この判断は、陰謀論を「妄想に駆られた危険な人々」として他者化し、そこから距離を置くだけでは、決して見えてこない。「陰謀論」の化粧用語的濫用を排し、それがわれわれに問いかける穴を塞ぐことなく、その問いを踏み分けて先へ至ること、このことが本稿における筆者の問いである。

2. 不安は「現実へ至る穴」である

陰謀論はしばしば個人の妄想、いわゆるヒステリーや統合失調症と結び付けられる。たしかに、「大きな力が世界を操っている」「総理大臣が私を見ていた」「体内にGPSを埋め込まれた」等の妄想は統合失調症患者に頻繁に見られる訴求症状であり、これら

くら本人が知っているようだが、それが客観的に参照・検証可能な形で記述され、論考内部に組み入れられていなければ、意味がない。自著の引用に関しても同様である(*3)

(5) だが、当該論考の最大の問題は、陰謀論を「荒唐無稽なもの」として他者の扱った態度に終始していることである。「陰謀論にはまり込んだ人々の間で、こうした情報のアップデイトをする人はいない」(p.114)と石戸は言うが、このような断言は「知ってしまったている」側から見下ろす本人の遠巻きな眼差しに支えられており、その不安や疑念の質に踏み入る姿勢や当事者意識はみられない。このような知的傲慢さは、仮想敵となる対象を探してきては遠くから揶揄嘲笑する、形骸化したネットカルチャーと不穏な同型性を有しており、最低限度の定義も不十分である。このため、当該論考において「陰謀論(者)」という呼称は、政治家発言から個人の不安感情までをアマルガム的にごたませ、糾弾するための旗印と化しており、このことが、論考内容を極めて貧しいものになっている。本稿ではこれらの点に即して、陰謀論をめぐる語りのもつ問題とその乗り越え方を考査してみた。

以上のような記述は極端な事例であっても、一般的に陰謀論を語ることは思いの外難しい。陰謀論とは、ある社会的事実(とりわけ大きな衝撃や不幸に紐づけられるもの)の発生の背後に何か大きな力の存在を想定する発想方法が、陰謀という妄想で先鋭化したものであり、それは屢々他者の属性に対する度を超えた想像を伴う。しかし重要なことだが、このような発想方法自体は必ずしも「不合理」なものとは限らない。たとえば、首相のよ

うな公権力の意思決定は実際に多くの市民の人生や、時に生命をも左右しかねないし、また、官僚組織が時の首相権力を「忖度」には陰謀論的発想との近似をみることができ。精神分析の語を借りていえば偏執的妄想(パラノイア)である。これは直接には、陰謀論研究の古典であるR・ホフスタッターの『アメリカ政治におけるパラノイド・スタイル』(一九六五)で名付けられた「偏執的様式」(the Paranoid Style)に端を発するもので、既に本書では「イルミナティ」の陰謀告発の事例が紹介されている(*4)。もつとも、ホフスタッター自身はこの用語借用はあくまで比喩であり、そこに病理学的な意味合いはないと明言していたし、その後の研究進展に伴って、病理学的解釈のもつ政治性やその一面的な断定には異が唱えられてきた(*5)。筆者としても、前段で述べた通り、陰謀論を単に排除封印するような態度に与することとは敢然と拒否せねばならない。しかし、陰謀論が社会問題化されるるとき、そこでは「妄想の集団化」が問題になっていることは確かであり、この点について精神医学、殊に精神分析の知見を借りて理解の礎とすることは未だ妥当な方法であると思う。なぜなら、精神分析は個人の神経症/精神病の背後に言語や権力という社会要因を透かして見ること、個人と社会を統合的にみる力動的な理論として考えられるからである。従ってここでは、精神分析の概念を参考に、陰謀論的思考が引き起こされる機序について確認しておきたい。

いわゆる陰謀論の根底には、「遠くにあるはずのものが近くに(ある(ように感じられる))という現実感覚に由来する不快がある。S・フロイトは一九一九年の論文において、「不気味なもの」das Unheimlicheの現実感覚に、幼少期の去勢不安と抑圧されたものの回帰をみていた。フロイトによればdas Unheimlicheとは不安の(特殊形態)であり、それは「結局、古くから知られて

いるもの、昔からなじんでいるものに還元されるころの、ある種の恐ろしいもの」として現れる。この語源的定義から出発し、フロイトは「隠されているはずのもの、秘められているはずのものが表に現れてきた時は、なんでもすべて不気味 (unheimlich) と呼ばれる」というシェリングの辞書的定義を手掛かりに、不気味な現実感覚の顕現に幼児期に抑圧された欲望とコンプレックスの再来をみてとっていく。このように「隠しながら顕し、顕しながら隠れる」不気味な感覚を主体に催させる作用は、後に R・バルトや G・ギュルヴィチが「象徴的なもの」の機能と呼んだものもつ両義的な力である。

フロイトによれば、不気味なものの顕現は、「秘密で、隠されているべきはずのものが外に出てきてしまったような、そうしたものの一切」のことであり、否定接頭辞 E はこの狂気に対する「抑圧の刻印」、主体が否認によって遠ざけてきた禁忌の徴として機能する。この観点からフロイトは E・T・A・ホフマンの文学作品を「文学における不気味なもの」の出世の大家」として分析し、とりわけ「砂男」の像が幼児期の子供に去勢を実施しかねなかつた厳格な父親の想像的結晶、「父の不安」の代理表象であることに着目して、眼球喪失や去勢をめぐる不安を読み解いていくのである。

しかし、論文後半部において、フロイトはさらに一歩進んだ議論に踏み込む。不気味なものの実在は、それまでの文学作品の分析によつては到達不可能であることを示唆するのである。ドッペルゲンガーのように人間が実生活で経験する unheimlich な経験の落ち着かなさ、これはフロイトをして「実際に経験する不気味なもの、たんに思い浮かべるだけの、あるいは読むだけの不気味

そこでわれわれの結論はこうなる、実際に体験される「不気味」が成立するのは、抑圧された小児的コンプレックスがある印象によつてふたたび活動したか、あるいは、克服された原始的確信がふたたび確かめられるように見える時である。
(*6)

物質的現実から心的現実への移行は、一般に精神的アニミズムへの退行として理解される。この両者の質的差異を媒介しているのは言語の実在である。言語によつて現実を対象化する表象作用が破れ、言語が意味をもたずただ不気味な現実感覚のみが連鎖的に指示されていくような生まの存在論的露呈が、そこにはある。ここでフロイトは、「親しい」言語慣用がその対蹠地、底知れない不信へと反転する境位こそをみている。裏返して考えれば、アニミズムの精神とは、主体がはじめてシニフィアンを前にしたときの好奇心と猜疑心が互いに融即した両義感情の顕現である。より一般化して考えれば、「アニミズム的確信」とは、既存の象徴体系では説明できない新たな記号論的現実が眼前に出現したときに人間が、第一的に行う解釈図式、これである。その根底には、現前する現実が言語においては捉えられないことに対する不安が伏在している。

フロイトのいう「アニミズム的確信」が陰謀論の発想様式と相似をなすとすれば、陰謀論とは主体が抑圧していたもの、要するに「見ようとしてこなかつた現実」の現前回帰に対する一種の防御反応として理解できる。この機制を、筆者は裏に「遠くにあるものが近くに感じられる不快」として予め一般化しておいた。妄想とは主体がそれまで抑圧し遠ざけてきた現実の顕現に対し、主

味なものとの区別せよとわれわれに暗示しているのではあるまいか」との結論に至らせる。仮死状態から生き返る白雪姫を子供が「不気味」とみなすことはないように、文学が表象的距離によつて「不気味」を他者化する芸術形式である限り、それは決して「不気味」な感覚には到達できない。ここでフロイトは、表象可能な想像上の「不気味なもの」と、表象不可能な体験としての「不気味なもの」の二種類に弁別しているのである。

フロイトが、この本質が「ある内容の現実的抑圧や抑圧されたものの回帰であつて、この内容の現実性に対する信仰の廃棄ではない」と書いていることは重要である。表象不可能な妄想に憑かれた主体は、それでいて現実を放棄したわけでは決してない。文学作品が幼児コンプレックスを「克服してしまつた」側から眼差すというイマジネールな表象関係を保持しているのに対し、この種の不気味は「心的現実性」とフロイトが呼んだ現実感覚である。想像上の das Unheimliche と体験としてのその差異は、物質的現実から心的現実へとその「現実」の質が退行的に変化していることに求められるのである。

だから、前者「表象可能な「不気味なもの」の場合にはある一定の表象内容が、後者の場合「表象不可能な「不気味なもの」にはその内容の(物的)現実性への信仰が抑圧されているといつてもいい。しかしこの後の場合の表現方法は、おそらく「抑圧」という言葉の正当な使用限界を越すことを意味する。ここに感じられる心理的相違を考慮して、文化人のアニミズム的確信が存在するその状態を、ある——多かれ少なかれ完全な——克服状態と言つた方がより正確である。

体が生み出した第一次的な解釈図式だが、それは否認による封印(あの否定接頭辞 E)を決壊させ、眩暈のするような近さをもつて主体の「すぐ隣」に顕れる。主体はそれについて語る術をもたず、言語は決して現実的なものの不快を説明することはできない。このことから、陰謀論者と「対話」してはいけない理由も自ずと見えてくる。陰謀論者は現在進行形で表象不可能な不快と戦つている。従つて他者の言語が普遍的で透明なものであればあるほど、この unheimlich な感覚が惹起されてしまうのである。このことは、陰謀論・否定論的な価値観に染まりやすい人ほど、他人からの批判を陰謀論と(オウム返式的に)特定し反発する傾向にあるため、そのような言及は有効ではないという経験的事実をも説明してくれる。われわれが陰謀論者を批判するまさにそのまなざしを使つて、彼らへ彼女らは自らの攻撃対象を見定めているのであり、陰謀論をめぐる批判と応酬には必ずと言ってよいほどの自己投射の連鎖が発生している。このことが結果として、何が「ほんとうの」陰謀論なのかを判別しづらい状況を生み、却つて言説の混乱をもたらす。陰謀論を語ることの困難の多くは、その言説がこのような複雑な合わせ鏡の中にあることに起因するのである。

畢竟、陰謀論的妄想の根底には、否認の禁忌によつて遠ざけていた現実の途方もない近さによつて惹起される存在論的動揺がある。端的な言い方をすれば、それは不安のセルフ・マネジメントに失敗している状況といえるだろう。だが強調すべきは、不安は決して排除すべきものでも、妄想の悪しき原因でもない、ということである。不安は人間が生きるうえで必然的に発生するもので、むしろ必要ですらあり、社会的・政治的な責任によつて引き

起こされた正当な不安も多い。原発事故による大規模な放射能汚染からCOVID-19の感染症リスクまで、災害や事件がそれまで意識の外に追いやられていた社会的現実を惹起することはよくある(*7)。それらの不安の多くは根拠なきものではなく、むしろ「現実への信号」としての強い徴候性を有している(*8)。

陰謀論の背景にある不安の原因を探ろうとすると、すぐにこの不安原因の責任範囲の問題に逢着する。正当な不安と陰謀論との「線引き問題」は、抽象的定義にとどまらない根幹的な問いなのである。主体に蓄積した不安の先鋭化した噴出が陰謀論となるが、その処方箋は決して不安を排除することではなく、あくまでも不安と向き合い、自らの問題として引き受けることではありえない。ラカンの言を借りれば「我々は不安という刃の上にごそ立ち続けなくてはならない」のである。(*9)

3. いかにして妄想は集団化するか

以上で示してきたように、個人の陰謀論的妄想とその集団化は、極めて地続きの現象として捉えられる。従って、精神分析は臨床治療であるとともに、人間の集団の本質をも同時に見据えるものでなければならぬ。フロイトは、『集団心理学と自我分析』(一九二二)のなかで以下のように述べている。

個人心理学と社会心理学もしくは集団心理学との対立は、われわれが一見したところでは、とても意義深く映じるかもしれないのだが、立ち入って考察してみると、その鋭さの多くは失われる。なるほど個人心理学は、一人ひとりの人間に照準を合わせ、その人がどんな風に欲動の蠢きを充足させよ

彼らは、戦後ほとんど政権をとることすら敵わなかったリベラル勢力を揶揄的に敵視し、マスコミの批判的役割や論議の政治的中立性はごっそり横において、自らを保守政治家の視点に同一化した。リベラル勢力を冷笑し見下ろす形式傾向にある。そしてこの時、保守やリベラルの定義が厳密に問われることはなく、朝日新聞のようになんとなく「それっぽい」ものが共通敵として選ばれる傾向にある。このような物語構成の主導者に最も適合する人物像が安倍晋三というアイコンであった。

二〇一二年末に誕生した第二次安倍政権は、徹頭徹尾「民主党(的なもの)の否定」の上に成立している。その中枢人物の多くはタカ派に属し、当初から日本会議をはじめとする宗教右派や超国家主義勢力との蜜月関係が取り沙汰されていたが、あくまで結果論から言えば彼らは国家主義イデオロギーを猛烈に推進したとまではいえない(*13)。むしろ、彼らは自らの政治的理念を表立っては争点化することなく、支持率等で旧民主党より上にあたる限り(正確にはその優越感を国民が支持し続ける限り)その優位を強調的にアピールすることで解散権を行使(*14)し、長期政権を継続したといえる。

ある政権の安定化ないし終焉についての説明は、極めて多数の要因が絡み合っているため、その説明はアドホックなものにならざるを得ない。しかし、本稿の目的に関してのみいえば、政権を強力に支えるインフルエンサーを持たなかった旧民主党政権に対し、第二次安倍政権がTV・ネットを問わずメディア上で擁護的解説を行う論客を多数抱えていることの意味は大きいと思われる。基地移設問題や震災原発対応に迫られる旧民主党政権に対し、既存リベラル勢力が比較的直球な嫌悪感を表明し、マスメディアも

うと努めるかを追跡する。けれどもその際、今個人が他の個人と結ぶ関係を度外視することは滅多にできるものではなく、できるとしても特定の例外的条件のもとでしかない。(*10)

パラノイアを発症した個人が陰謀論めいたことを言うからといって、それが即問題となるわけではない。われわれが陰謀論を有害で危険なものと思ふのは、それが「集団化」しているときである。陰謀論が集団妄想の形をとって現れるとき、それは異常な攻撃性を露呈するのであり、多くの場合そこには個人を動員する中間集団やインフルエンサーの介在が示唆される。ところが「陰謀論」という安易なラベリングは、しばしばこの社会的な質量差を見失わせてしまう。陰謀論的発想そのものが悪いのではない。われわれが真に問うべきは、その集団化の過程である(*11)。ここで問いは転回される。つまり、個人がたまたま有した陰謀論的発想がいかにして集団的に再編成され、突飛な行動へと駆り立てられるのか、と。

右派陰謀論の典型的な妄想パターンとして、「戦後リベラル勢力」のもたらした偏向報道やGHQによる自虐史観のせいで日本の国益が損なわれている、というものがある。このような語りをごくまで「陰謀論」として括れるかの判断は難しいが、その多くが朝日新聞のような大手メディアの影響力(*12)とその「偏向性」を過大に見積もることによって自己を根拠づけている点を見るに、そこには陰謀論的な発想材料が十分出揃っていると考えられよう。これにポリテイカル・コレクトネスや普遍的な人権概念の使用を窮屈だと感じるライトな層(予備軍)も含めれば、この妄想は相当な範囲に涉って共有されていると考えられる。概して批判的論調に傾いたのに比べ、安倍支持層の論客は、政府がどれだけ不法行為や失策を続けようとも、(とりわけSNS上で)政権擁護とその裏返しとしての「批判勢力への否定的揶揄」の言論を張り続けた。実際に彼らがどこまで政権中枢と関係していたかについては定かでないが、今後の情報公開を俟たねばならないが(*15)、このような似非論客(*16)の手厚い支援が、後述する陰謀論の集団化に対し果たした先導的役割は大きいと思われる。

この問題構造を考えるには、政界特殊な事情とメディア状況の双方を考えねばならない。卑近な例として、元経産大臣の甘利明が行った日本学術会議に対する虚偽発言(デマ)がある。甘利は二〇二〇年十月初頭、「中国の軍事研究『千人計画』に日本学術会議が積極的に関わっている」という虚偽情報をブログに記載し、このデマは政権に近い右派論客の間で大量に拡散された。石戸論考はこれを「荒唐無稽な陰謀論」と一蹴しているが、これを陰謀論として名指すだけでは全く不十分である。甘利には自党首の不祥事を擁護し、虚偽を拡散するだけの十分な動機があるからである。

案の定、菅首相や加藤官房長官(いずれも当時)は本件について答弁拒否を連発し、他方で学術会議に関する様々な虚偽情報・デマが散布され、メディアを賑わした(*17)。その過程で門田隆将や上念司など多数の右派評論家が「インフルエンサー」として虚偽情報を拡散し、学術会議への的外れな糾弾を先導したのである。裏返して考えれば、政権にとってみれば、ここまでして世論を混乱させなければ取捨できない事件だったのである(憲法上の規定に違反しているのだから当然である)。甘利の発言がどれほど計算的に発せられたものなのかは本人に聞かなければわからな

いが、一般論で考えれば、政治家が党利党略で動くことなど当然の前提である。腹藏なく言えば、彼らにとつては有権者が自分の党派に一票を投じ、野党など敵対勢力を誹謗中傷してくればそれでよいのであり、その発言はもはや「陰謀論」を本気で信じていたか/方便としての嘘なのかは全く問題にならない境位にあることに注意しなければならない。

このような虚偽情報の拡散・受容過程を辿るとき、われわれは一つの仮説に行き当たる。現代で陰謀論的言説がある形式をとつて集団化するとき、特定のメディア・プラットフォームが重要な役割を担っているのではないかと。樋口直人は、安倍晋三のFacebookコメントの分析から、ネット右派の生活世界について興味深い報告をしている(*18)。安倍はFacebookを積極的に活用していることで知られており、本人のページは、支持者によって現在も多くのコメントが投稿され続けている。当然書き込み者の多くは保守・極右層に大きく傾いているが、六十五万人(二〇二一年九月現在)のフォロワー数からも分かるように、閲覧者の中には安倍を「何気なく」フォローしている層も含むため、その発信範囲は必ずしも政治的右派に限らない。安倍がこれらのコメントに逐一返信することは勿論無いが、そのことが結果として、コメント欄をネット右派が「聖地巡礼」を行う総本山の空間に押し上げていくのである。容易に予想されるように、そこは嫌韓反中から歴史修正主義、トランプ礼賛から野党へのネガティブキャンペーンまで、めいめいの読者が「安倍さん」に語りかける形で二次創作的に政治や歴史問題を語る仮想空間と化しているのである。

これに、二〇一四年総選挙における自民党の選挙戦略(*19)、組み込まれる。有権者は与野党問わず(その多くは自民党中心に物語を構成する)あらゆる政治家の発言行動を二次創作の対象にしていくので、彼らが(対抗的な)言論活動を形成しようとする場合、二次創作に絡み取られることを回避しながら国会質疑等の批判的職責をこなし、自らの活動と理念を訴えていく(いわばセルフブランディング)という困難な活動を強いられることになるのである。

では肝心の、これら陰謀論の直接的源流はどこにみられるか。これに関しては社会的的研究を待つほかないが、大局的には反共主義に基づく政治的な誹謗中傷に加え、二〇〇〇年代に浮上した中国脅威論がその両柱をなしているものと推察される。一九五〇年代、マッカーシズム吹き荒れる冷戦体制のなか、仮想敵国(勢力)を名指し攻撃対象に仕立て上げる動員手法は最高潮に達した(*24)、一部に煽っていたこのような敵対感情がネットメディアによって再びあぶりだされる形で拡散・動員されたのが現在の右派陰謀論であると考えられるのである。こうして、第二次安倍政権は、安倍を筆頭とする閣僚が問題行為をおこすたびに、「支持論客による擁護/批判者・批判対象へのデマ攻撃」という形で対抗的な政治言説を多量に投下し、むしろ支持層に自らのカリスマを顕示しながら乗り切ってきたのである。このように考えると、二〇二〇年アメリカ大統領選後、安倍支持者の多くがトランプ支持に雪崩れこみ、街頭デモ行進までして不正選挙を訴えた理由が分かる。単純な話、トランプが安倍以上の「大物」だったからである。安倍が「桜を見る会」に関して行った虚偽答弁は(本人が認めたもの限り)一一八回である(*25)、トランプは就任から二年の間に八一五八回の嘘をついており、その「嘘つき」の勢

つまり右派イデオロギーを前面に押し出すことなく、表向きには全く異なる争点を掲げて解散権を行使する「隠されたナショナリスト」としての姿勢(*20)を重ね合わせて考えたとき、われわれは一つの結論に達する。二〇一〇年代の自民党の広報姿勢は、有権者の語りを誘発する政治記号の集積、「データベース」を提供する役割を果たしており、有権者に二次創作的な政治言説を率先して「語らせる」ことで、その影響力を着実に浸透させてきたのではないかと。事実、極右勢力からの明確な後方支援をもつ安倍は、支持集会等では憲法改正等のイシューに明確な意欲を示しているながらも、首相在任時はそれらについて暗示的に含まれるにとどめ、それらを実行に移すには至らなかった(*21)。そして、歴史否定等のいかにもネット右派が好む無理筋な問題に関しては決して民意に問うことなく、その一方で歴史教科書や報道内容等に関しては行政権を利用して直接的な統制介入を行ったのである(*22)。ここまできると、安倍のネット戦略が陰謀論の巢窟となる機制が明らかになる。安倍(自民党)は明確な超国家主義イデオロギーを志向しているながらも、表向きにはそれを国民に訴えかけることには消極的で、あくまで犬笛(dogwhistle)的な「示唆」(*23)にとどめる一方、オンライン上では率先して有権者が二次創作的に政治や歴史を語るプラットフォームを提供したのである。それらの多くは歴史否定やレイシズムを当然に含むが、安倍運営側はそれらを黙認し「飼い慣らす」ことで、自らの支持勢力へと編成していったのである。これに比べて左派の側は、陰謀論的言説が集団化するにあたって体系的にも帰属集団的にも貧しい基盤しかもたない。

念のため指摘すれば、野党勢力も例外なくこの物語消費の中心には退任まで留まるところを知らなかった。既に多くの指摘があるように(*26)、トランプ政権周囲は無数のフェイクニュースや敵を名指すポピュリズムにまみれ、トランプは自らの発言において事実か嘘かをほとんど問題にしていなかった。リアリティ・シヨウによって培われた、場当たりの虚偽を撒布し続けるこの一貫した態度は、本人をして陰謀論的な二次創作の格好の「スター」の地位にのし上げたのである。

このように、本邦の右派陰謀論は、もともと存在した反共的な政治土壌に加え(*27)、SNSのコメント欄という言説参加型のメディア形式や国家主義的欲望を巧妙に使い分ける自民党のネット戦略等が複合的に作用し、大きな存在感を示すようになった。しかし、彼らのもっとも最大にして近しい「陰謀」、つまり現役の首相や政権関係者が実際の利益供与や不正の意思決定に関与した可能性だけは、決して疑うことがないのである。

4. 社会集団の不適切な比較—— 「じつちもどつち」論法がわれわれに問いかけるもの

石戸論考に戻ろう。このエッセイの論旨は右派陰謀論の背景には急速に台頭する中国への警戒感があるというものであり、論証の成否はともかく、結論としては妥当な見解だと思う。しかし最後に「加えて指摘すれば」リベラル系の著名人にも陰謀論があるとも付言する。これは明らかな蛇足であり、このことに言及するならば、百田尚樹や甘利明に匹敵する著名人の「左派陰謀論」をきちんと例示した上で批判考証すべきであった。このようにとつてつけたような、比較として公平でもなければ十分でもないやり方で特定の集団属性を貶めるのは控えめに言って卑怯なやり方

あり、社会集団の比較を行う場合は（それが右派/左派という極めて便宜的で雑駁な区分であったとしても）能う限り同等の条件下において公平に比較を行わねばならないという最低限の記述倫理が欠落していると言わざるを得ない。

石戸氏は「左派陰謀論」の一例として「安倍政権が問題を起こすと芸能人が逮捕される」という言説を持ち出すが、これを陰謀論と断言できるかは甚だ疑問である。というのも、それは芸能ゴシップに偏重したワイドショー的な報道姿勢に対する不信感情の頭れとも解釈できるからである。例えば、（なぜか引用されていないが）鳩山由紀夫氏による以下の発言は陰謀論の一種としてニュース記事にも取り上げられた。

沢尻エリカさんが麻薬で逮捕されたが、みなさんが指摘するように、政府がスキャンダルを犯したとき、それ以上に国民が関心を示すスキャンダルで政府のスキャンダルを覆い隠すのが目的である。私も桜を見る会を主催したが、前年より招待客を減らしている。安倍首相は私物化し過ぎてきているのは明白である。（*28）

「前年より招待客を減らし」という言及は「スキャンダル」とは関係ないが、この発言は陰謀論というより、マスコミの報道姿勢に対する疑念を交えた苦言的主張と考えるほうが自然である。語用論的に考えれば、政府不正を「覆い隠す」という表現は陰謀の示唆とも、報道姿勢への苦言ともなりうるが、発話者がそれ以上何を想定しているかについて、読者は判断できない。もちろん仮にこの発言が賛同者の多くを異常行動に至らせた場合、鳩山は

て、日本の右派もリベラルも大差はない」（p.110）と締め括られている。しかしその結論は、論述からは、まったく導出されないのである。同段ではこうも述べられる。

事実をかき集める仕事をしている私が考える陰謀論への予防策があるとなれば、リアリズムを大切にして、わからないことを安易に決めつけず、事実を直視すること。

事実に基づく検証を行わず他人の発言を「陰謀論」と決めつけた人物が何を言っているのか、凡人である筆者には全く理解できない記述である。この背景に見えてくるのは、石戸氏の語りの根本にある、他者を排除して自身を無根拠に中立なリアリストと自称する安全地帯的なそれである。従ってここでは陰謀論が発生する機序や発想様式、ついにその定義すらも明らかにされない。そしてその必然的帰結として、「陰謀論」というラベリングはこ都合主義的な批判材料として、仮想的に使用されることになる。いわゆる「藁人形論法」だが、些末な他者の語りを陰謀論の批判材料とする本人の知的不誠実さ（*29）は、典型的な藁人形論法に陥っていないか。

このような批判は相手の心中を決めつけてかかるという至極「陰謀論」的発想によつて、他者の陰謀論を指弾するという倒錯の中にある。そこでは自説に都合の良い断片がコラージュ的に縫合される一方、都合の悪い現実を徹底して無視されているのである。このように用語を他者糾弾のための記号として使う態度は、パノイア患者が死守しようとする「ボクこう思ったんだもん」というあの心的現実への記号論的退行とあやうい同型性を有して

その煽動者として帰責されるだろう。だが先述したとおり、実際には左派が有権者を陰謀論に動員するプラットフォームは相対的に貧困なものである。「左派陰謀論」なる存在は、単なる政府不正やメディアの忖度報道に対する有権者の不信を、陰謀論という解釈図式に強引に還元した結果なのである。

大量買収にしろ、極右学校法人への利益供与事件にしろ、安倍がさまざまな問題を引き起こし続けてきた（きている）のは事実であり、そのたびごとに公文書改竄や官僚の自殺などの讞寄せを受けた被害が実際に発生してきた。これらはどれも、民主主義社会であれば当然マスメディアによつて検証される必然性がある。だがマスメディアにとつて、これらを報道することは直球の政権批判に当たり、一部視聴者の反発や政権担当者からの圧力が強くなることもまた十分に想定できる。このような状況下で報道が「楽な方に流れ」た場合、その全き結果として、政府不正の追求よりもゴシップ的な芸能報道に傾くことはメディアなりの合理性追求の結果として、これも想定できることである。鳩山発言は、現政権への苦言に合わせてこのように批判能力の欠如したマスメディアに対する不信を吐露したものとみなすのが妥当である。

不適切な比較は問題を雲散霧消させる。片や巨大なヘイト本市場を形成し、現役の政治家や作家に大きな影響を及ぼしている中国（右派）陰謀論と、現状取るに足らないSNS上の言説を比較して「右も左も陰謀論」というのは、社会集団の比較として極めてお粗末なやり方である。執拗に結論を「どっちもどっち」に落とそうとする石戸氏の態度は、論証の妥当性と議論の解像度をほやけさせ、本質から目を逸らさせる似非ジャーナリズムに加担しているとはいえないか。論考は「事実を軽視する」という点におい

おり、加之「異質な他者」を排除することで自己の優位を否認的に主張する形式性の観点からみても、陰謀論者と同様の認識論にあると言わざるを得ない。つまり、陰謀論を他者化して遠ざけるまことにその姿勢こそが、陰謀論が跋扈する社会的前提を準備するのである。この論考における知的不誠実が、自身をリアリストと規定しながら陰謀論を撒きちらすネット右派の姿と重なってみえるのは必然的なことである。

興味深いことに、いくつかの研究結果は、政治的左派に比べて右派のほうが有意にフェイクニュースや陰謀論を信じやすいことを伝えている（*30）。また一般に、（右でも左でもない）「普通の日本人」と自認する層ほど、ネット右翼的な言説に賛同しやすく、いわゆる陰謀論を真に受ける傾向にある。もちろん、筆者はこのことから左派の優位を強調しようというわけではない。また、条件を整えば左派（リベラル）においても陰謀論の集団化は十分発生しようと考えている。そうではなく、これまでの議論に沿って考える場合、以上の事実は、そこで賭けられているものが左右の対立の皮を被った、現実認識とそれに相対する虚構的価値観との間の闘争であることを示唆しているのではないだろうか。

「右でも左でもない普通の日本人」というネット右派の自己規定は、彼らが（ネット上で）極端な盲信や放言を表明するための免罪符の機能を有していると考えられるが、その背景には自らを「中立」「無党派」「リアリズム」などと規定することによつて、潜在的不安を予め否認的に排除しようとする、あの否定接頭辞「無」の機能と同様の心的機制がある。それは、「現実」を旗印に掲げるまさにそのことによつて現実を拒絶的に否認する、倒錯した言語機能をもたらす。

問題は、「現実」をめぐるこの過度に政治的な言語機能が、却って現実への準拠を脱臼・失効させることである。フロイトによればバラノイアへの記号論的退行は、外的現実の否認により内的な心的現実を死守しようとするものであった。要するに「人は見たいものしか見ない」ということであるが、重要なのはここで現実のもつ外在的拘束が放棄されるということである。現実はずつていけば目の前に降ってくるものではない。むしろ、その認識のために大規模な社会調査や、マスコミなどの公共的言論の流通が必要条件になる。問題は、現実のもつ外在的拘束が失われたとき、このような言語の公共的性質は機能しなくなるということである。明晰かつ確実な言葉で現実を認識する努力を怠った「リアリズム」は、曖昧でポエティックな語りの免罪符にしかならない(*31)。ここでは語る主体は、形骸化した態度表明によって他者を拒絶的に否定し、その上に立つことでしか自己を根拠づけることができなくなる。陰謀論の「同じ穴の貉」に陥っているのは、石戸自身なのである。

5. 現実の敗北と「分断の政治」の先に

同じく『現代思想』誌に収録された秦正樹氏の論文（「右も左も「陰謀論」だらけ?…左派における陰謀論受容のメカニズム」）は、その名の通り政治的左派の陰謀論受容傾向とそのメカニズムを検討したもので、「右派的な有権者ほど陰謀論を受容しやすい」という従前の実証的傾向を踏まえながらも、あえて「左派陰謀論」の実在可能性を一定の留保をつけて検討している。本論文は石戸論考の杜撰さに比べれば正確さは高く、計量政治学の方法論に忠実に則った論文であるが、そこにはより注意して腑分けしてみな

ければいけない分け目がある。

一つは陰謀論の定義である。本論文はWEBサイトのパネルモニターを対象にした選挙意識調査を許にしているため、陰謀論をめぐるワーディングは調査デザインの根幹に関わる。これについて、当該調査では左派勢力が「歪んだ選挙制度」に関する陰謀論を受容しやすいという仮説の下、リスト実験の対象設問群の中に以下のような処置群をそれぞれ挿入し、その意見に同意できるかどうかを訊ねている。

処置群1：政府は、自分たちの都合が良いように期日前投票の期間を伸ばそうとしている。（『期日前陰謀説』）
処置群2：政府は、自分たちの都合が良いように十八歳にまで投票権を拡大させた（『十八歳投票権陰謀説』）

調査ではこれらの処置群への賛同が陰謀論受容の心理的根拠とされるが、（処置群1はともかく）特に処置群2は、それが「陰謀論」かどうかの判断が非常につきにくい内容である。十八歳選挙権は確かにポジティブな権利拡大といえるが、この政策導入の背景には秦氏自身も指摘しているとおり、若年層での自民党支持率が（相対的に）高いことがある。仮に、導入（二〇一五年）時点で欧米や韓国のように若年層が革新政党支持に傾く状況にあったら、自公政権が投票権拡大に前向きに動くことはなかっただろう。無論それはあくまで予測に過ぎず、ある意味で「穿った見方」かもしれないが、政治的意思決定の背景に党利党略があることなど「当り前」のことであり、党利党略の推測を、即陰謀説と断言することまではできない。

結果として、これら実験処置群のワーディングは、陰謀論を炙り出すというより、政府与党に対する漠然とした政府不信を広範に拾う質問設計になっている。秦氏自身、陰謀論を「一意に定め

ることの困難さや問題点」を抱えており、それは「便宜的」な操作的定義に過ぎない」と断ってはいるが、そうであれば「陰謀論」という分析概念で有権者の感情傾向を説明することの必然性が揺らいでくる。従って、本論文は結果的に左派勢力に陰謀論受容の「土壌がある」ことを示しているが、その实在証明としては弱いものとならざるをえない。

もう一つ着目すべきは、左派陰謀論の根拠が統計や支持率のような「数字」に関するものとして提起されている点である。これは左派をめぐって争われる陰謀論的言説の大きな特徴であるように思われる。秦の言う通り、「左派による陰謀論的言説は、しばしば政府あるいは与党である自民党への批判と弁別しにくいという「厄介な」性質のために見逃がされやすい」。ここでは、（真つ当な）政府批判と検証不可能な陰謀論とが入れ子構造になっているが、それはむしろ陰謀論的言説においてはよくみられることである。

安倍晋三前首相は、二〇一四年頃から、アベノミクスによって失業率が改善したことなどを功績として主張していたが、それに対して一部の左派は「公表されている経済成長率は政府がごまかしている」といった説にもつづいて批判してきた。もつとも、当時は、リベラル派の中でも、さすがにその種の意見を真に受ける人は少数派であった。しかし周知の通り、二〇一八年に統計データの意図的な改ざんが明るみとな

り、「陰謀論」がなんと「事実」となったのである。（本文p.118）

「陰謀論がなんと事実となった」。だが、そんなことは十分想定できた話である。厚労省「毎月勤労統計」をはじめとする大規模な政府統計不正が明るみになった二〇一八年当時、既に森友学園や加計学園への利益供与事件や公文書改竄事件は大きな耳目を集めていた。自政権にとつて都合の悪いデータを隠蔽・破棄し、公文書改竄すら厭わない政権が、次は情報操作や統計偽装で学術成果を歪めることなど、容易に想定できることである。つまり、社会科学的な認識から考えれば、当然想定しうる一つの可能性が、「決定的」な証拠が出てこないために「陰謀論」と言われていたにすぎないのである（しかし、それを疑わせる状況証拠は確実に存在していた）。結局ここで問われているのは、陰謀論で「すら」なく、何より行政の言葉をめぐる信頼の問題であり、その原因は単に与党政府の不正と背任行為であるにすぎない。

ここでこの本質は、情報公開制度をめぐる問題にあることがわかる。この背景には当然、権力による情報の独占状況がある。「国境なき記者団」による日本の「報道の自由度」ランキングは二〇一〇年（鳩山政権）の十一位をピークに降下し、二〇二一年は六十七位である。むしろこの間には政権を揺るがす多くの事件と、行政の対応放置によるその長期化があり、「赤木ファイル」をはじめとする重要証憑が遅々として開示されず、またようやく文書が明らかになったらそのほとんどが黒塗りで「開示」されるという状況があった。これらの情報非公開をめぐる不作為は(*32)、

とうてい民主主義的な先進国の状況といえるものではない。政治的陰謀論の多くは、行政情報の透明性があれば防ぐこと

ができたものと考えられる。情報の公的な独占は、われわれと権力の距離を遠ざけ、「どうせ変わらない」というニヒリズムを蔓延させる。だが人は権力から自由になることはできない。社会的権力関係の歪みが特定の個人に集中し、その矛盾が凝縮的に露呈するとき、遠くにあるはずのものが目の前に近くに感じられるあの不快、表象不可能な心的現実に基づく陰謀論の芽が吹き始める。それはわれわれ自身が問題を語る言葉を持たないことの全き反映であるが、そのような環境を形成してきたのは徹頭徹尾社会権力の側である。アレントもいうように、「権力はつねに公開性がなくなるから始まる（*33）」のである。遠くにあるものを無理に解釈しようとする、寄せ合わせのコラージュにしかない（*34）。政治的陰謀論とは政治の言語の貧困であるが、それは「遠くにある」言語の独占を取り戻すことによつてしか解決されえない。敢えて啓蒙主義的な云い方をすれば、陰謀論の盲信の解消と民主主義的なプロセスは不即不離なのである。

権力による情報独占と、その裏返しとしてのフェイクニュースの大量拡散が蔓延した先にあるのは「分断の政治」である。それは言うならば、意図的に論争を引き起こしながら問題含みの政策を強行することで、「トラブルを引き起こし」ながら支持者と批判者を二項対立的に分断し、相互不信を生み続ける「言説の政治学」¹⁾ともよぶべき統治技法である。菅政権の歴史に残る唯一の「成果」といえる学術会議任命拒否とそれに関する虚偽拡散の過程は、このような統治技法の先鋭化を象徴する事件といえる。

こうした現状背景には、現実と虚偽のあいだの言説的闘争があることは間違いない（*35）。そこではわれわれは必然的に、正当な不信の認識領域を最大限に見定めながらも、そこから逸脱し先

鋭化した陰謀論を批判する勇氣ある判断力が求められる。これは、他者の「陰謀論」を脊髄反射的に名指す態度によつては決して獲得されえない。逆説的ではあるが、陰謀論の直接原因となつて不安を自ら受け止め、手続きを踏んで丁寧言葉にしていこうとでしか、それを克服する道はありえない。

整理しよう。（一）陰謀論的発想は遠くにあるはずのものが近くに現れ、且つそれが言語によつて表象不可能であること、不快によつて発現増幅されるが、それは単なるパラノイアの発症と異なる。（二）陰謀論の問題性は「異常な個人」の妄想としてではなく、それが集団化し現実的な影響力を有する社会的機序への着目によつて理解される必要がある。従つて陰謀論の原因となる不信の社会的背景とその妥当性の双方が見定められねばならない。（三）殊に右派陰謀論の拡散過程からは、政治事件や（右派）政治家集団を「データベース」として二次創作的な政治語りを誘発し、拡散させるメディア環境の存在が示唆される。（四）陰謀論のパラノイアの性質は、言語によつては表象不可能な他者の不快を顕わす現実感覚が、記号の二次創作的なコラージュという形で妄想化されたものである。従つて、陰謀論を他者の不快に対する糾弾材料として記号的に使用する限り、陰謀論批判が陰謀論に陥る可能性はつねに存在するのであり、ここでわれわれは、陰謀論という批判枠組を捨てる潔さが必要である。

陰謀論の発現を抑制するためには、このような権力の不快を語る言葉が、どれだけ質的に洗練され、かつ公共的に共有されるかにかかっている。その意味で、言葉の流通を担うジャーナリズムの責任は極めて大きい。「右も左もどっちもどっち」というニヒリズムにまみれた雑駁な思考停止に感嘆されてはならない。公衆

1) 「防衛すらしな」という「日本型生権力」との関連を示唆したものととして、小松美彦「自己決定権」という罠——ナチスから新型コロナウイルス感染症まで」現代書館 2020がある。

* 9 J・ラカン（J・A・ミレル編）『不安』上、小出浩之・鈴木國文・菅原誠「古橋忠寛訳、2017、p.21。

* 10 S・フロイト「集団心理学と自我分析」『フロイト全集 第17巻』須藤訓任・藤野寛訳、岩波書店、p.129。

* 11 外部を遮蔽した「コミュニケーション」においては、大澤真幸「増補 虚構の時代の果て」筑摩書房 2009の特にpp.90-142を参照。

* 12 メディア論的にいえば、とりわけ日本の新聞は単一言語による広範囲の読者を有する均質性と、東京中心の全国紙にブロック紙・地方紙が階層構造になっているという流通的特質のため、掲載情報の画一性が高く、新聞ごとの論調の差異は、相対的に微細なものではない。

* 13 ただし例外として公教育の領域がある。道徳教育の必修化と、教育基本法改定がそれである。

* 14 統計上、民主党政権時代のほうが上回っていた数字は多い。この事実から考えられるのは、「他に支持できる政党がない」という理由からくる二〇一二年以降の多くの有権者の投票行動には、ある種の「虚偽意識」が反映されているのではないかと一点である。

* 15 実際には、官房機密費をはじめとする、不透明な支出予算が存在するため、この記述はやや不正確である。つまり、「政府資金が論客に流れている」根拠は十分にあるのであり、このことをはっきりさせるためには政府資金の流れを透明化する情報公開制度の構築が求められる。実際、関連論者の書籍が党関係者によつて大量購入され、その後メルカリ等に大量出品される事例が後を絶たない。

* 16 その「論客」の多くは学術的業績を全くまたはほとんどたない。虚偽情報がどのような経緯で拡散されたかは、旗智広太「学術会議めぐり広がる大量の誤情報、まとめサイトが影響力。政治家やメディアも加担」に詳し。 (<https://www.buzzfeed.com/jp/kotahatachi/bakujuukakigai>) (以下、Webページは全て二〇二二年九月二日最

* 1 石戸論「陰謀論者の「不安」」現代思想 49(6)、2021、pp.112-3。
 * 2 加えてこのような語りは、属人的な語りと（首相のような人物の）「責任を問う語り」との差異を融解させ、混同させていく点において有害である。次註（3）を参照されたい。
 * 3 但しこれは必ずしも石戸氏のみならずされる問題とは限らない。百田の他にもいわゆる「安倍応援団」と揶揄される無理筋な政権擁護人員は、政権奪還以後、TVのコメンテーターや新書・ビジネス書等の媒体で政権との距離の近さを強調し、「ボクだけが知っている」本気の安倍総理「像」を語るに語り掛ける形式で一部の視聴者層の関心を獲得してきた。これは日本のマスコミが持つ「政界報道」政治報道ではない）の方法的特殊性にも起因する根の深い問題であるように、筆者には思われる。

* 4 R.Hofstadter, *The Paranoid Style in American Politics and Other Essays*, 1966, Harvard UP.

* 5 辻隆太郎「陰謀論へのインテロダクション」現代思想 49(6)、2021。

* 6 S・フロイト「不気味なもS」『フロイト著作集3 文化・芸術論』高橋義孝他訳、人文書院、1969、p.353。

* 7 この点について述べたものとして、櫻村愛子「三・一一以後の「不安」とリスク文化」現代思想 40(4)、2012、pp.215-25。

* 8 「不安を煽るな」というスローガンに代表されるように、本邦では「不安」を絶対悪として神経質的かつ集団的に排除しようとする言説機制がみられることが多い。これはマスメディアや批判的市民の問題提起に対し向けられることが多いが、マスコミ自身がこのような語りを先導する場合もある。このような不安排除言説への加担は、「現実に至る穴」としての不安を押し流し、人間の危険察知能力や問いの回路を塞ぐことで思考停止へ導くものであり、妥当な社会政策がとられることを阻害する、有害性の高い言説である。この不安排除言説と社会

終閲覧)

- * 18 樋口直人「ネット右翼の生活世界」樋口直人・永吉希久子他編「ネット右翼とは何か」青弓社 2019, pp.73-103.
- * 19 F・シェーファー, S・エヴァート, P・ハインリッヒ「ネット右翼と政治——二〇一四年総選挙でのコンピュータ仕掛けのフロバガンダ」樋口・永吉他編前掲書, pp.133-63. 本論文では選挙期間中のネット右派による投稿の多くがbotによる自動投稿で、社会集団の存在を状態以上に大きく見せたものであったことが明らかにされている。
- * 20 もちろん、個別にみれば、麻生太郎氏が憲法改正について行った「ナチス」あの手口に学んだらどうかね(二〇一三年七月二十九日)をはじめとして、欧米であれば政権が吹き飛ばされるレベルの問題発言は数多い。
- * 21 典型的なのが戦後七〇年談話であり、歴史否定論者の側で、反戦平和主義に立つ側のどちらからも一応の解釈ができる文章があくまで示唆的に挿入されている。これは安倍自身というよりは官僚の業績と考えたほうがよいだろう。
- * 22 安倍や中川昭一が「女性国際戦犯法廷」を扱う番組内容に直接介入したNHK番組改変事件(二〇一一年)を筆頭に、水面下での報道介入や歴史否定は進行している。これについては永田浩三「NHKと政治権力——番組改変事件当事者の証言」岩波現代文庫 2001を参照。
- * 23 政治家が暗号的表現で(人種差別的な)メッセージを送り、特定の有権者を動員することを「犬笛」と言う。政治的犬笛の言語的效果については Jennifer Saulによる研究がある(“Dogwhistles, Political manipulation, and Philosophy of language”, in D.Fogal, D.W.Harris, and M.Mossleeds.), *New Work on Speech Acts*, Oxford U.P., pp.360-83)。
- * 24 半藤一利「昭和史戦後編 1945—1989」平凡社, 2009, pp.281-311.
- * 25 ただし、虚偽の対象・期間が異なることに加えて、安倍が答弁拒否や国会開会拒否によって説明責任を行う場から逃げているという側面があるため、単純な比較はできない。
- * 26 例えば、D.Kellner, *American Nightmare: Donald Trump, Media spectra*

- * 27 *cle, and authoritarian populism*, Sense, 2016.
- * 28 このことは、自公政権の集票を担う右派宗団体の多くが「反共」を行動原理にしている(してきた)ことが大きく要因している可能性がある。二〇一九年十一月十八日、本人のTwitter (https://twitter.com/hatoya_mayuko/status/1196425908527095808)での発言。
- * 29 石戸氏が構成を担当したという早野龍五氏の「科学的」は武器になる(新潮社二〇一一年)でも同様の知的不誠実さがみられるが、この点については牧野淳一郎氏による丁寧な批判検討がある(<http://jun-takusaka.sakura.ne.jp/articles/811/note034.html>)。
- * 30 たよえば、Maggie Fox(CNN)による二〇一二年六月二日の記事を参照(<https://edition.cnn.com/2021/06/02/health/conservatives-false-news-study/index.html>)。
- * 31 このように事実となる対象関係を不必要にばやかし、曖昧さを強調する内面の記述は、全きフレイトの定義において「シュールレアリスム」といえる。しかし、便利な言葉なので使わせてもらったが、この形容は芸術史上のシュールレアリスム文学や詩に対して大変に失礼な表現だと思っ。
- * 32 赤木ファイルや名古屋入管のウイシユマ・サンダマリ氏死亡事件に關わる「文章黒塗り」は大きな話題となったが、政権を揺るがす行政事件に限らずとも、独法や地方自治体レベルで、答弁拒否・文書非公開・対応無視が行われる事例が後を絶たない。このような官僚制度の弊害は国家的な棄民態度と相関しており、今後情報公開制度の構築はきわめて重要な政治課題であるといえる。
- * 33 H・アレント「新版 全体主義の起原」第3巻 大久保和郎、大島かおり訳みすず書房, 2017, p.172.
- * 34 パラノイアの発症においては、まず妄想が先にあり、それを補強するために周囲の人物や要素が記号化され、その物語材料として使用されていく。日本の極右・ナショナリズムの場合、まさに日本という「空虚なシニフィアン」を中心に盾にしてあらゆる外的他者を記号的に配置しつけることができるので、このような妄想を形成しやすい。
- * 35 このことを論じた先駆的業績として W.Benjamin, “Das Kunstwerk im Zeitalter seiner technischen Reproduzierbarkeit” (1935-6)が有名。